

文化的景観の変化とその利用可能性
 —タイ王国、ラオス人民民主共和国における水辺集落を事例として—

建設工学専攻
 住環境計画研究

ME18034 北浦由樹
 指導教員 清水郁郎

1. 研究背景・目的

「微笑みの国」と呼ばれているタイ王国（以下タイ）や、「最後の桃源郷」と呼ばれているラオス人民民主共和国（以下ラオス）においても、近現代化の波は押し寄せており、居住形態や街の景観は日々均質化が進んでいる。また、急速な観光地化により、タイのバンコク近郊やラオス南部メコン川流域の水辺集落では、宿泊施設や飲食店の無秩序な建設が進んだ。観光が主要な産業である両国において、人々の生活は伝統と近代化の狭間で日々変化を遂げている。

両国の観光において運河や河川の役割は非常に大きく、それら無くして現在の観光地はないと言っても過言ではない。人間の生存にとっても必要不可欠な存在である水（運河や河川）は、古来、生業、経済や政治、信仰の対象であり、その意味や用途は無限に広く、人々への恩恵は計り知れない。水は人間にとってなくてはならないものである一方、時に災禍を巻き起こすなど、生活や文化のさまざまな分野に影響を及ぼしてきた。そんな水は地球上に遍在するが、その性質や量は地域や環境によって様々である。伝統的居住空間の特質を探る際に、水の性質や量の普遍性と多様性の分析はひとつの鍵になるだろう。

タイやラオスにおける水辺集落では、現在、若年層の都市部流入による過疎化や高齢化といった課題に対して、ありのままの地域資源を活かすコミュニティ・ビジネスとしての可能性をCBT、コミュニティ・ベースド・ツーリズム（community-based-tourism）に見出し、多くの取り組みが萌芽している。

本研究は、地域に根差した生活や生業の風景は地域固有の文化的景観として観光資源になりうることを考え、①水辺の居住空間や周辺環境の様態を明らかにし、②文化的景観の変化から今後の利用可能性を探ることを目的とする。

2. 研究方法

本研究で扱う資料は、タイ、ラオスで3つの水辺集落を対象とし（図1）、2018年から2019年の間、計5回に渡り行った現地調査で収集した。

表1：調査場所、調査期間

調査場所	調査期間
K村（タイ）	2018年8月18日—2018年8月21日 2019年8月16日—2019年8月20日
N村（タイ）	2019年3月10日—2019年3月14日 2019年8月21日—2019年8月26日
H村（ラオス）	2019年9月11日—2019年9月22日

調査内容は、住宅の実測調査（計17軒）、居住者への質問調査（計19人）、集落断面実測調査（K村2面、N村5面、H村3面）、集落全体地図の作成（住居配置や土地利用を含んだ生活・生業空間を示す）である。

実測調査は調査対象地に暮らす村人の住居を訪問し、各住居の平面図1/50、断面図1/50、外構図1/100または1/200を採取した。その際、空間に置かれている生活物品も書き入れることとした。また、集落断面図1/200は集落において文化資源・自然資源となりうる河川、運河、居住空間、生業空間の位置関係などを記録した。

インタビュー調査は、調査対象者の家族構成、住居建設、一日の行動などの基本情報の他に、食事・就寝形態、信仰の様態について聞き取りを行った。また、雨期・乾期の生活や、運河の利用方法、村人たちの社会関係について聞き取りを行った。



図1：調査対象地と周辺主要運河

3. 調査地の概要

本研究で取り扱う調査対象地は、全て運河、河川沿いの集落であり、バンバン川（チャオプラヤー川の支流）、レック川（ピン川の支流）、メコン川がそれに該当する。それぞれの集落の位置する地理形状は、平野（K村）、山間盆地（N村）、河川中洲（H村）に分類することができる。

それぞれの人口、住居数はK村：468人、169軒、N村：284人、84軒（隣のP村と合わせた数）、H村：1121人、201軒である。

4. 文化的景観

文化的景観とは、地域での暮らしや人々の生業と一体となった文化的価値を有する、日々の生活に根ざした身近な景観である。これらの概念は1992年に世界遺産条約の世界遺産定義のなかで新たに導入された。

文化的景観において、地域住民は地域社会の不可欠な構成要素であり、地域社会はその歴史、伝統、文化、慣習などといった様々な要素を含み、地域の「今」を表現し形成している。

5. 水辺集落の生活空間

本調査地における伝統的住居形態は高床式である。また調査地毎に、住居における空間構成は類似しており、それに伴い空間の名称や利用方法が共通している

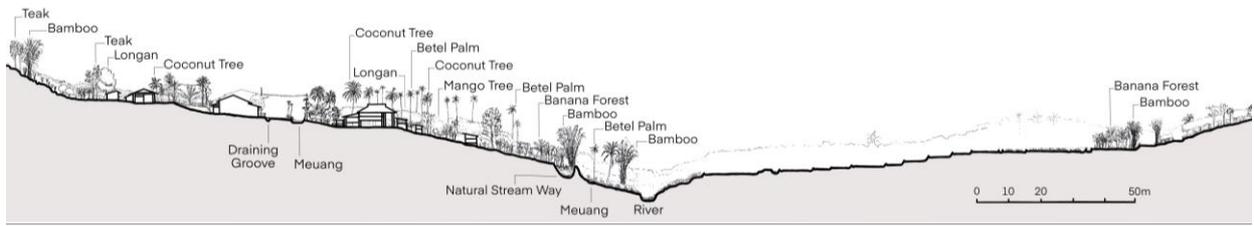


図2：N村集落断面図

(図3)。図3のH村の事例では、saan(軒下空間)、no huan(居間空間)、noi huan(寝室空間)、huan kua(食事空間)により、住居が構成されている。

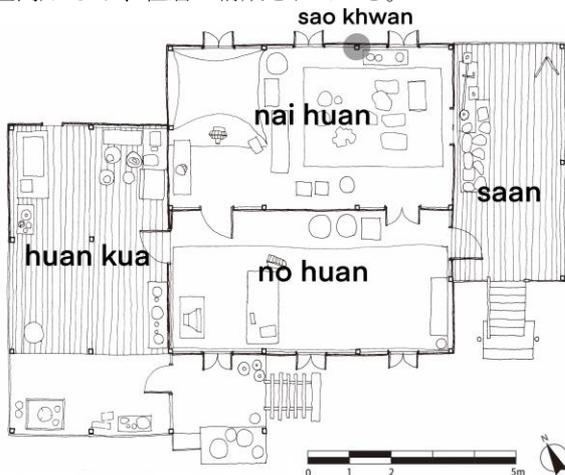


図3：住居床上平面図 (H村)

住居にはサオクワン(sao khwan)という神聖な柱が存在する。この柱は新築する際に最初に立てられ、儀礼の焦点にもなる重要な柱である。場所は主たる寝室内の2番目の位置になることが多い。その後、住人により柱の足元へ石が置かれることで、その場所がメーナーントラニー(土地の神)となる。また、屋敷内に別の住居を新築する際には、このメーナーントラニーが建設の基点となる。

K村、H村は母系社会で、女系の親戚関係が土地を共有して暮らす屋敷地共有集団を組織する(図4)。夫婦は結婚すると女性側の家で女性側の親と一緒に暮らし、住居や土地は娘(姉妹の場合は妹)が継承する。

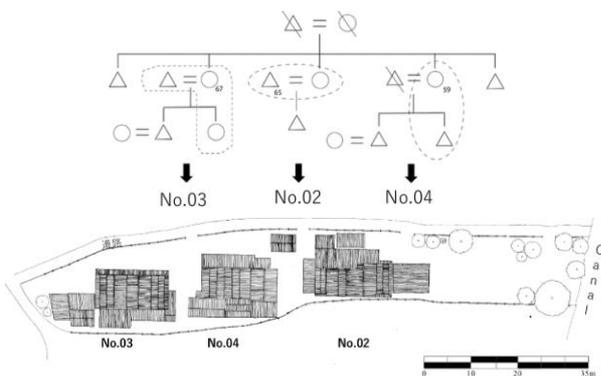


図4：家系図兼屋敷図 (K村)

6. 水辺集落の生業と生業空間

本調査地における生業は主に水稻耕作であり、水田はその生産を助ける河川と共に文化的景観を構成する要素である。K村の位置する平野部では運河—果樹園—屋敷地—森林—水田と続く空間配置が一般的である。N村においては図2に示すように、森林—農地—河川—

農地—屋敷地—森林といった、山間盆地ならではの空間構成となっている。ここでの生業空間の特徴として、重力灌漑「Muang Fai」(ムアン・ファーイ)がある。地形の傾斜により生み出された水流が、複数の堰で分岐されて農地全体に行き渡る灌漑システムである。

7. 生業の変容と文化的景観

生業は調査地ごとに、その変化の度合いに大きな差がみられた。最も変化の大きいK村では、1980年代頃から徐々に行われていたサンドピットビジネス(良質な砂を水田の底から掘り起こし、都市部での建設に利用するもの)が2011年に起きた大洪水を機に加速した。この背景には、大洪水後に政府が河川に設けた水門の影響がある。それに伴い、稲作の在来種の消滅や生産量の減少がもたらされた。その結果、水田を売却する農家が増加し、同時に空き家の増加をもたらしている。これらの生業の変化は、K村における文化的景観の急速な変化をもたらしている。

K村の事例は、基盤となる生業が地域から切り離されると文化的景観は急速に失われ、その再生は困難であることを示す。

8. 文化的景観の利用可能性

運河をはじめとする在来の文化資源を観光資源と読み替え、積極的に観光化を進めている地域がある。K村の対岸のP村では政府が推奨するCBTを積極的に推進している。そこでは、約12年前にホームステイプログラムを開始し、7軒がホームステイ可能な住居である。N村もK村同様に、CBTの取り組みには至っていないが、N村が属するメーチェム郡は地域の活性化に積極的に取り組んでおり、河谷盆地の景観を活用した観光が萌芽する可能性を持つ。砂糖ヤシの栽培、村落の創設にも関わる仏教寺院、先住のクメール人による遺跡などの資源を持つH村は、地域行政からCBT推進地域に選定されている。

文化的景観は生業や日々の暮らしのなかで組織される景観要素の集合体であることから、自然資源や文化資源などの多様な要素を識別し、その可能性を評価する必要がある。また、文化的景観はCBTにおいて観光資源として機能することから、従来、観光と縁の無かった地域においても、急速に進む近現代化に伴う均質化に対応するうえで、文化的景観の保全や利活用を進める必要があるだろう。

参考文献

- [1] 内山純蔵、カティ・リンドスロム『東南アジア内海文化圏の景観史と環境 第1巻 水辺の多様性』2010年、昭和堂
- [2] 綾部恒雄、林行夫『タイを知るための60章』2003年、明石書籍
- [3] 菊池陽子、鈴木玲子、阿部健一『ラオスを知るための60章』2010年、明石書籍